



青葉の森公園芸術文化ホール イベントレポート

当ホール主催の公演・講座の雰囲気みなさまに発信する「ボランティアライタース」の方によるレポートをお届けします。

EVENT REPORT

平成 29 年
7 月 23 日 [日]

6 回の朗読講座を受講した生徒達による発表会である。(講師 2 名、受講生約 20 名、男性は 1 人のみ) 今回も全編、千葉ゆかりのものがたりを取り上げていて、

出演 千葉ゆかりのものがたり朗読講座 受講生
共演 手話サークル いちちょうの会
講師 雨宮 陽子
今村 容子

出てくる地名や方言に聞き覚えがありとても身近に感じられた。県内各地に伝わる昔話が 4 つ。香取郡神埼町、長谷寺(ちようこくじ)の「ネコじゃののさん」。旭の「そう礼ぎつね」。君津の「でえだく坊と石射太郎山」。富津の「かっぱのおんがえし」。

これらはひとり(もしくは二人)で朗読するので、声の調子を変えたり間をとったりして工夫していた。節をつけて謡うところもあったが、ここは朗読する人によってメロディーが違うのだろうか? これに対し、数人で役やナレーションを分担し、小説の一部などを読む形式もあった。

ちばイスム
beyond 2023

千葉ゆかりのものがたり朗読会

入場無料 年齢制限なし

7月23日(日)
14:00開演(13:45開場)
青葉の森公園芸術文化ホール 2F練習室

『千葉ゆかりの物語 朗読講座』受講生による朗読会です。子どもから大人まで、どなたでも是非お立ち寄りください。今回は手話との共演もあり、目と耳でお話を楽しめます。

朗読作品

※変更になる場合がございます

- ・「夏美のホタル」 森沢明夫・著
- ・「お弁当ふたつ」 高田郁・著 『ふるさと銀河線』より
- ・「はっちむどんのきつね」「屋根の長者」「片歯の梅」 千葉の昔話編集委員会編 『読みがたり千葉のむかし話』より
- ・「青べか物語」 山本周五郎・著
- ・「そうれいぎつね」 安藤操・文 『厚紙むかしむかし絵本 へいじいさんとむじな』より

出演:千葉ゆかりのものがたり朗読講座 受講生
共演:手話サークル いちちょうの会

【主催・協賛中】 青葉の森公園芸術文化ホール

〒260-0852 千葉市中央区青葉町977-1
TEL 043-266-2611 (9:00-17:00 / 月曜休館)
FAX 043-266-1960 (24時間受付)

森沢明夫の「夏美のホタル」。山本周五郎の「青べか物語」。高田郁(かおる)の「ふるさと銀河線」より「お弁当ふたつ」。複数で読むと、場面がよりリアルになり物語が立体的になる。同じ文章でも、本を読み視覚を通して脳に達するのと、朗読を聴き聴覚を通して脳に達するのでは何か違うと感じた。多分、朗読している人の感情そのものが声につけて伝わってくるからであろう。

「お弁当ふたつ」は、実はリストラされていた夫がいつも通りに出勤していくのを妻があとをつけ...というストーリーで、児童書というわけではないが、私の前に座っていた小学3年生位の男の子がじーっと聴き入っていた姿が印象的だった。

また、今回は千葉市の手話サークル「いちちょうの会」のメンバーも部分的に参加した。手話というと手の動きで伝えると思いがちだが、実際に見ると、手だけではなく表情や全身を使っている。声にせよ、手話にせよ、何かを人に伝えるには、伝えたいという強い思いがまず必要なのだと思えられた。



第一部は千葉県にゆかりのある場所を題材にした、「ネコじゃののさん」、「そう礼ぎつね」、「夏美のホタル」、「でえだく坊と石射太郎山」の4作品を9人の受講生が発表しました。休憩をはさみ第二部は山本周五郎・作「あおべか物語」や高田郁・作「ふるさと銀河線 軌道春秋」から「お弁当

ふたつ」など千葉県に関連のある文学作品を取り上げ、10人の方が発表してくれました。作品については講師の先生方から、わかりやすく説明が付け加えられました。また、内容に合わせたスライドや手話サークルの方々の活躍もあり変化のある朗読会を鑑賞することが出来ました。出演者も緊張されたと思いますが、しっかりとした声で朗読されました。



「好きこそものの上手なれ」という言葉通り、講座に参加されたみなさんは声質も印象的で、本当に朗読が好きなたちなのだと思いました。今後長く続けられ、発表の場を多く持つてほしいものです。さらなる活躍を期待しています。ボランティアライタースなのはな

ふたつ」など千葉県に関連のある文学作品を取り上げ、10人の方が発表してくれました。作品については講師の先生方から、わかりやすく説明が付け加えられました。また、内容に合わせたスライドや手話サークルの方々の活躍もあり変化のある朗読会を鑑賞することが出来ました。出演者も緊張されたと思いますが、しっかりとした声で朗読されました。

写真/ボランティアカメラマン 合屋 琢二